江戸時代には六坊となって、彦山六峰の一つに位置付けられた。

豊後姫岳合戦　永享七年（一四三五）七月、大内持世は安芸・石見・坊長・伊予の軍勢と共に、大友持直が楯籠る豊後姫岳（臼杵・津久見市境、高さ六二〇㍍）を包囲し、深追いしすぎて伊予の守護河野通久を失う大敗を喫した。同七年末から翌年六月にかけて、再度の包囲と調略でやっと姫岳を落城させ、大友持直を決定的に没落させた。

嘉吉元年（一四四一）六月、京都では、結城合戦戦勝の宴が赤松満祐の新邸で開かれ、宴たけなわのところで、公方義教が斬殺されるという事件が起こった。この時、公方に陪席していた大内持世は築地を乗り越えてその場を脱出したが、重傷を負い、翌月、傷口が悪化して落命した。公方義教は、自分にすり寄る武士を重用して現地との繋りの強い武士を疎外することになり、かえって事態を混乱させることが多く、幕府権威を失墜させる結果をもたらした。

八　応仁の乱と大内政弘

大内政弘の上洛　大内持世が非業の死を遂げたあと、盛見の子の教弘が家督を嗣いだが、寛正四年（一四六三）、伊予国の守護河野通春と管領細川勝元との合戦に、縁家にあたる通春を応援するため、同六年伊予に出陣して、船中で病に倒れ、興居島に卒した。それから間もない応仁元年（一四六七）一月、応仁の大乱が勃発した。大内教弘の子政弘は山名宗全に招かれて東上を決意し、八月、二万以上の大兵を率いて西陣に入り、山名方の劣勢を逆転させた。文明元年（一四六九）、細川勝元は、山名・大内の分国を攪乱して、京都での大内政弘の足をすくおうとした。すなわち、前の筑前守護代であった伯父大内掃部頭教幸（入道道頓）を誘い、仁保加賀守盛安と共に、長門赤間関に挙兵させ、豊後の大友親繁に**豊前国守護職**を与え、筑前国守護職を対馬に亡命していた少弐教頼に与えた。

大友親繁の豊前支配　四月十日、豊後府中を出発した大友親繁は大内分国の口原に布陣した**城井秀房**・長野行種らを破って、城井秀房を戦死させ、一か月ばかりで豊前半国を支配下に置き、五月中にことごとく平定した（『野辺文書』）。つづいて筑前・肥前に打ち入り、少弐・千葉氏と共に探題館を攻略した。

大内教幸馬岳で自害　文明元年十二月、大内道頓と仁保盛安は、周防鞍掛山で、留守を預かる陶弘護と戦って敗れ、安芸に移り、さらに石見の吉見信頼の支援を得て、長門へ入り、阿武郡で、陶弘護・益田貞兼と戦って敗れ、豊前へ遁れた。文明二年正月二十五日、**馬岳**において、道頓は子の加嘉丸と共に自殺した（『大内氏実録』）。『坊長風土注進案』は、文明元年九月二十四日、謀反により、馬岳において自刃したとし、『歴代鎮西志』は陶・益田・**紀井**・長野の大軍に包囲され、文明元年十二月、数回防戦したが、仁保加賀守盛安（弘直とある）が戦死し、道頓も妻子を殺したあと自殺したと記している。しかし、このころ、豊前は大友親繁によって占領されており、道頓も親繁も東軍方として行動していることを考えれば、矛盾していることに気付く。

奈良興福寺の『大乗院寺社雑事記』の次の記事は、大内道頓の自刃について、従来の諸説に疑問を投げかける。

当家（大内）の事、忠節を致すべきの由、仰せ下され候（義政より）、管領（細川勝元）様の御書頂戴申され候、道頓の事は、年罷り寄り候、嘉々丸の事、自今以後、奉公を致さしむべ

く候旨、一味同心申定め候、御内書・御教書の事、早速成し下され候はば、畏み存ずべく候、この旨をもって、管領様の申し御沙汰候はば、目出べく候、恐々謹言

（文明二年）二月九日

内藤中務丞　武盛
豊田大和入道元秀
杉　三河守　重隆
杉　豊後守　弘重
二保加賀守　武安
問田備中守　弘縄
陶　五郎　弘護

吉見殿（信頼）

この意味は、公方義政へ忠節を致せという管領細川勝元（東軍）の手紙を頂きましたが、大内道頓は老齢であるから、子息の嘉々丸を今後は奉公させるということで一味同心したので、管領にこれを取り次ぎ、公方の私信と幕府の安堵状を出してくれるようにして頂きたいというもので、道頓軍を各所で破ったという陶弘護の名が見え、なぜ、東軍方に一味同心しているのか理解に苦しむところである。このころの段階では、留守を預かった陶弘護らが、領国を維持していくため、意図的に道頓を東軍方として行動させたのであろうか。

文明八年三月二十七日以来、佐田因幡守忠景ら宇佐郡衆は、防州より豊前へ渡り瀧池山（所在不詳）に陣を張って、馬岳・岩石両城の敵（大友親繁・少弐政資らカ）と対峙し、守護代杉弘勝が在京中のため、大将の派遣を求め、五月二十九日、余（宇佐郡院内町）陣合戦をはじめとする宇佐郡の合戦で、敵数輩を討ち取ったとして、政弘の感状を得ている（『佐田文書』）。

少弐政尚の豊前侵入

朝鮮の『成宗康靖大王実録』の文明八年の記事に、少弐政尚が宗職盛・宗国久等の兵四〇〇〇をもって豊前に侵入し、古城（馬岳か香春岳か）に拠ったので、大内氏の代官陶弘護が兵三〇〇〇を率いて、新城を築き対陣し、五月の合戦で大内方六〇人、少弐方六人の死者を出したが勝負がつかなかったとある。

文明八年八月、大友政親と大内道頓に対して、幕府は、大内道頓の被官内藤藤左衛門尉と仁保加賀守盛安が、豊前において合戦しているのをやめさせ、和睦させるよう命じている。翌年十二月十五日付の『大友政親書状』によると、政親らの調停で合戦はやんだが、少弐方が仁保加賀守を殺害したため、国中が正体なき成り行きとなった。内藤氏に一味した族は遺恨を止めたけれど、九州大乱の基になりかねないと心配している。

東軍内部に分裂が生じていることがわかる。

文明九年三月、三年前に死んだ細川勝元・山名宗全の両雄に代わって、京都で中心的存在であった大内政弘が、公方と和睦して帰国すると、早速、豊筑を大友・少弐氏から奪回するため、九州に渡海し、またたく間に豊前・筑前を支配下においた。

九　大内教幸の乱

大内教幸が史料に登場するのは嘉吉の変直後である。

嘉吉二年（一四四二）十二月、管領畠山持国は少弐教頼・大友持直・大内孫太郎教幸等の落所を相尋ね、不日治罰を加えよという命令を大友一族志賀親賀・親昌両人へ下した。この年三月、筑前千手城・馬見岳城の合戦に、安芸国の平賀尾張守頼宗が大内教弘に従って参加している。